天狗に呼ばれた

新田由紀子

その神社のことは気になっていた。「天狗の社」ともいうらしい。行ってみようと思うがとにかく遠い。電車を乗り継いで三時間、さらにバスで一時間。ひと山越えれば日光という山奥である。

栃木県鹿沼市草久古峰ヶ原の古峯神社の名をどういういきさつで知ったのだろう。栃木は父母の故郷で親類縁者も多い。この古社に篤く帰依する誰かがいて、それは父だったかもしれないが、「こぶがはらさま」という名は耳奥にあったのだろうか。そんな定かでない記憶に加えてもう一つ。登山をしていた頃「栃木百名山」なるツアーで、山中に突然現れた大鳥居がレトロな食堂と土産物屋を従えて森閑と立っていたのを見た覚えもある。

今年も桜が咲いてお定まりの花嵐。一日だけの日和にかねて思案の古峯神社へといざ見参。東武日光線新鹿沼駅からバスは街を抜けて芽吹きに靄る田園を走り、里山にしおらしい山桜を見つつ山間に入ると、大芦川源流の瀬音清々しい終点古峯神社に着く。帰りの便を考えて滞在は二時間。大鳥居をくぐって参道を進み石段を上がって社務所に茅葺の本殿・拝殿と続く。大芦川に切った堰の水音高く、山の霊気に身が浄められる。

祭神を日本武尊とし、開基は千三百年程前とか。建物や境内に古々しさは見受けられないが、ずらりと奉納された大小の天狗面や講の石碑は数百年昔のものもある。日光開山の基となった修行場も残る。中で、江戸鳶木遣りの顕彰記念碑が目についた。そうか、父が深川木場で材木屋をしていた頃に、知り合いの木遣り衆からこの神社のことを聞いたかもしれない。想像が膨らむ。

境内に続く庭園「古峯園」をひと巡りして、お目当ての昼食「直会（なおらい）」へ。参籠棟の廊下を迷いに迷ってやっと大広間へ辿りつき、戴いた神饌料理（神様のお下がり膳）の美味しかったこと。御神水は清冽な山河の味。赤いお椀のけんちん汁はなんとも懐かしい母の味だった。

天狗ではなく、父母のルーツに呼ばれたということか。